

JFA こころのプロジェクトが児童に与える影響の検証  
Verification of the effect which "JFA kokoro no project" has on children

1K08B166-6 林 啓太

指導教員 主査 間野義之 先生 副査 木村和彦 先生

**【背景】**

今日の日本は多くの教育問題を抱えている。特に不登校生徒の増加・学級崩壊・いじめ問題など、近年、児童・生徒の学校不適応行動が問題化している。子供たちが目標を失い、無気力状態に陥ることが原因のひとつとなっていると考えられるが、解決のための方策の1つとして、「総合的な学習の時間」が教育課程内に設けられた。また、JFA は、児童に夢を持つことの大切さを伝え、児童の自己実現意欲を向上させることを目的に、小学生高学年を対象として、総合的な学習の時間を利用し、J リーガーや日本代表として活躍したトップアスリートが、夢について語る、「JFL こころのプロジェクト 夢の教室」を始めた。この授業を行うことで、「児童が積極的に行動するようになった」などの意見が述べられており、「総合的な学習の時間」を通して、子供たちの意識、意欲改善に一定の効果が現れている可能性が示唆される。しかし、総合学習の時間に教師以外の人間、特にスポーツ界で夢を成し遂げた人が児童に対して夢について考える授業を行い、児童が自身の夢について深く考えることが、児童の意識、意欲改善にどのような影響を与えるかについて、定量的な検証はされていない。

**【目的】**

トップアスリートの社会貢献活動「JFA こころのプロジェクト 夢の教室」が児童に対して与える影響を明らかにすることを目的とする。

**【方法】**

2009 年度に行われた「JFA こころのプロジェクト 夢の教室」の参加者、小学校 5 年生を対象にアンケート調査を行った。アンケートは授業前 1 日～3 日と授業後 1 日～3 日の 2 回行われた。

I、授業前後で児童に対して効果があったことを統計的に明らかにすることを目的として、男性指導者、女性指導者を分け、事後から事前の平均値の差を取り、PASW Statistics18 を用いて、t 検定を行った。

II、指導者の授業実施回数の増加と得点差に相関関係が認められるかを統計的に明らかにすることを目的として、男性指導者を授業実施回数ごとに分け、それぞれ事前と事後の平均値を出し、PASW Statistics18 を用いて、独立変数を指導者の授業実施回数、従属変数を事後から事前の平均値の差を取った値として、単回帰分析を行った。同様に女性指導者も授業実施回数ごとに分け、それぞれ

事前と事後の平均値を出し PASW Statistics18 を用いて、独立変数を指導者の授業実施回数、従属変数を事後から事前の平均値の差を取った値として単回帰分析を行った。

**【結果】**

I、質問 1) の「1.自分の将来の夢を持ちたいと思う。」、「2.自分の将来の夢を実現したいと思う。」、「3.将来の夢を実現するために必要なことをわかりたいと思う。」、「4.夢の実現にはいろいろな人の協力が必要だと思う。」、「5.夢を持つことは、とても大事なことだと思う。」、質問 2) の「1.目標をもつこと」、「2.自信を持つこと」、「3.努力すること」、「7.友人を大切にすること」、「8.助け合い、人に感謝する気持ちをもつこと」、「9.人の話をよく聞いて参考にすること」の項目について事前と事後の差（事後の平均値－事前の平均値）に有意差が認められた。

II、男性指導者の授業実施回数によって質問 1) の「7.夢をかなえることは大変なのでつい楽な道を選んでしまいそう。」の項目について、指導者の授業実施回数の増加と得点差にやや関係性が認められたが、残りの項目では関係性は認められなかった。また女性指導者の授業実施回数別で見ても、「4.夢の実現にはいろいろな人の協力が必要だと思う。」と「10.かなわない夢は、意味がないと思う。」の項目について、指導者の授業実施回数の増加と得点差に関係性が認められたが、残りの項目では関係性は認められなかった。質問 2) では女性指導者の授業実施回数によって、「4.失敗してもあきらめないこと」の項目についてのみ、指導者の授業実施回数の増加と得点差にやや関係性が認められたが、残りの項目については男女ともに関係性が認められなかった。

**【考察】**

I、夢の教室に参加することで、児童の夢や目標を持ちそれを実現させたいという意欲が高められ、自分自身に自信をもてるようになることが明らかになり、児童の無気力感の自己不明瞭感が改善される可能性が示唆された。また、児童の他者の話を参考する意欲は高まり、他者への感謝や友人の大切する気持ちが大きくなることが明らかになり、児童の無気力感の他者不信・不満足感が改善される可能性が示唆された。

II、カリキュラムが決められており、また「JFA メソッド」によるフィードバックが行われることにより、指導者の授業実施回数とは関係なく、児童に対してある一定以上の授業効果があると考えられる。